

第5章 総括

本書では古代東北アジアにおける金工品の生産・流通を考えるための基礎作業として、晋式帯金具を取りあげ、金工品や彫金技術を記録・計測について実践的な検討を試みた。これまで研究者の観察視点を伝える「手段」であった高倍率写真が、文化財写真の立場から再構築され、スケール情報をもつ、第三者が検証可能な「記録写真」として生まれ変わった意義は大きい。今回撮影できた晋式帯金具は、日本国内所蔵資料の一部に留まるが、中国や韓国など海外に所在する資料についても、条件さえ整えば同じ機材・方法で、同一水準の写真撮影することは可能である。実際問題として金工品の調査・撮影には乗り越えなければならないハードルがいくつもあるが、本書には撮影方法や課題についても明記している（第3章）。筆者らがすべての資料を撮影できなくとも、本書を契機にそれぞれの国や所蔵機関において基礎資料となるスケール情報をもつ高倍率写真が撮影され、その成果が広く学界で共有されれば、金工品・彫金技術の研究は飛躍的に進展するであろうし、むしろそうなって欲しいと切に願う。

また SfM-MVS による三次元モデルとの比較を通じて、第1章で課題として掲げたレンズの歪みの問題については、ほぼ無視できるレベルにあることが確認できた点も重要であろう（第4章）。これは、高倍率写真から彫金技術の観察はもちろん、計測も十分可能であることを意味し、昨今の金工品研究の方向性を基本的に支持する結果となった。ただし、個々の計測値がもつ意味については、更なる吟味が必要であろう。なお今回作成した SfM-MVS による三次元モデルは、彫金技術を観察する手段としては、高倍率写真を越えるものとはならなかったが、現在進行形で文化財への応用が進んでいる手法であり、将来的に SfM-MVS でも彫金技術が観察可能な三次元モデルが作成されることは自明である。また鋳など立体形状の比較検討においては、まったく異なる効果を発揮することは言うまでもない。もしも1mmに満たない加工痕跡の三次元形状を計測し、製品間におけるその形状の異同を客観的に提示できるようになれば、金工品・彫金技術研究はまったく異なるステージへと到達することとなる。

彫金技術を細大漏らさず記録する高倍率写真、三次元形状をそのまま記録する三次元計測、研究者の必要な情報を捨捨選択して記録する実測図、いずれの手法にも長所と短所（限界）がある。ただ、それぞれの手法の適性を見極め、何よりも資料を徹底的に観察し、記録すべき情報を明確化することで、いずれもが実物に取って代わる「唯一無二の二次資料」になりえる点を強調しておきたい。少なくとも1mmにも満たない彫金の加工痕跡を観察する上では、実物（一次資料）よりも今回撮影された高倍率写真（二次資料）の方が遥かに有効であることは、理解していただけたのではないだろうか。

最後に、実地での調査・撮影時や、高倍率写真の観察を通じて得られた第2章の知見をもとに、晋式帯金具と龍文透彫帯金具の生産と流通の問題について、いくつか考えるところを述べたい。まずはあらゆる議論の前提となる個々の資料の彫金技術についてである。先行研究においては、とりわけ蹴り彫りや毛彫りなどの線彫りの把握について、少なからず意見の相違が認められるが、その根拠が写真など客観的な方法で提示されないまま論が展開されることも少なくない。本書では、観察所見だけでなく、根拠となる加工痕跡の高倍率写真を可能な限り提示することを心掛けた。スケール情報をもたせるかどうかはさておき、彫金技術の可視化とその共有は、議論を後戻りさせないためにも必須であろう。

次に製作工程についてである。いくつかの晋式帯金具にみられた蹴り彫りによるケガキ線は、今回初めて見出されたものである。文様の施文作業とケガキ作業に同じ工具が用いられていたのであれば、ほぼ並行して走る二つの線彫りは同時になされた可能性が高い。これは、少なくともこれらの帯金具に関しては、「彫金」と「成形（透かし彫り）」が別々の工程として捉えられるべきものではなく、一連で進められた可能性を示唆するものである。透かし彫りの為に要所に穿けられた孔と、鋳孔の穿孔のタイミ

表 7 本書で扱った帯金具の彫金技術

	彫 金				文 様		鋳造	鍛造	備 考
	毛彫り	蹴り彫り	円文	点文	龍文(目)	周縁文様			
天理・伝中国	×	○	○	×	蹴り彫り	雲、流、複	○	○	晋式帯金具第1段階
新山	○	○	○	×	蹴り彫り	雲、(流)	○	○	晋式帯金具第2段階
五條猫塚(三葉文)	×	○	○	×	—	—	×	○	—
京大・伝中国	×	○	○	○	円文	雲、複	×	○	晋式帯金具第2段階
行者塚	×	○	×	○	点文	雲	○	○	晋式帯金具第3段階
五條猫塚(龍文)	×	○	×	○	透かし孔	波	×	○	龍文透彫帯金具
七観	×	○	×	○	点文	波	×	○	龍文透彫帯金具

*晋式帯金具の編年は〔藤井2002・2014〕による。雲：雲気文、流：流雲文、複：複線波状(円)文、波：波状列点文。

ングについても同じことを指摘できよう。

今回調査した晋式帯金具に限っていえば、蹴り彫りと円文からなる藤井康隆の晋式帯金具第1段階から、点文が加わる第2段階を経て、円文が欠落する第3段階へというように、彫金技術の変化と主として文様の変化にもとづく相対編年がスムーズな対応関係を示す(表7)。このような彫金技術の変化に合わせて、最も象徴的に変化するのが龍文の目表現である。すなわち、第1段階においては蹴り彫りで表現していたのが、第2段階になると円文、第3段階になると点文で表現するものが現れる。第3段階の彫金技術や目表現がまったく同じではないにしても、龍文透彫帯金具へと受け継がれていく点も重要である。晋式帯金具については中原(西晋・東晋)に加えて、中国東北部の三燕などが製作地として想定されており〔藤井2003、町田2006など〕、日本列島への直接的な搬入経路としては金海大成洞88号墳出土例の発見を契機に、朝鮮半島南東部の金官加耶が改めて注目されている。これらの晋式帯金具について同一水準の調査をおこなえば、新山古墳出土例や行者塚古墳出土例の製作地や搬入ルートを歴史的状況や共存遺物などに依ることなく説明することも十分可能となる。

なお新山古墳の素環垂飾に用いられた毛彫りについては、現状では例外的な位置づけに留まることが浮き彫りとなった。先行研究をひも解いても新山古墳出土例を除くと、晋式帯金具における毛彫りが写真によって提示されたことはない。現状では、新山古墳出土例に毛彫りが採用されていることを晋式帯金具全体に拡大して評価するのは危険であり、資料のさらなる精査は喫緊の課題である。

龍文透彫帯金具については今回調査できたのはたった2例に留まるが、これまでに調査をおこなった福岡県月岡古墳出土例や慶州皇南大塚南墳出土例を含めて、晋式帯金具にみられたような彫金技術の多様性は認められず、比較的短期間に、近い関係性の中で製作された可能性が高い。製作地については舶載品とみる意見と、倭製とみる意見があり、前者については新羅製とみる意見が有力であるが、中国製や百濟製とみる意見もあり、決着をみていない。ただ、眉庇付冑など同時期の金工品と彫金技術や波状列点文を共有することを根拠に、帯金具についても倭製とみる意見については〔橋本1995など〕、帯金具とほかの金工品間の彫金技術の精度の違いを直視すれば〔諫早・鈴木2015〕(図版8-8~10)、保留せざるを得ない。となると、舶載品である公算が高まってくるが、ここで強調しておきたいのは、晋式帯金具とは共通する部分もあるが、断絶する部分の方が俄然際立つ、ということである。精粗や巧拙などという言葉では言い尽くせない文様表現のレベルの違いは、巻頭図版の龍文を見比べれば容易に理解できるであろう。晋式帯金具の周縁に施された雲気文や流雲文、複線波状(円)文から、波状列点文のみへという変化も、漸移的なものとは言い難い。晋式帯金具が鋳造部品と鍛造部品を組み合わせるのに対し、龍文透彫帯金具は基本的に鍛造部品のみで構成される点も、無視できない。以上のような違いをふまえると、晋式帯金具を製作していた地域で生み出されたと考えるよりは〔藤井2001・2014〕、そのアイデアや技術を受容した周縁地域で新たに創出されたとみる方が説得力がある〔上野2014b〕。

紙幅はもはや尽きた。タイトルとは程遠い内容に終始したが、東北アジアにおける金工品の生産と流通を明らかにするためのスタートラインには、何とか立てたのではないかと思う。本書が、今後の金工品・彫金技術の研究に少しでも寄与するところがあれば、望外の喜びである。(諫早)